世界の文学

8

スタンダール

赤と黒　冨永明夫訳

世界の文学　8　©1963

スタンダール

訳者　冨永明夫

昭和38年3月12日初版発行
昭和41年4月28日24版発行　価390円

発行者　宮本信太郎

本文整版印刷　三晃印刷株式会社
扉・函貼印刷　求竜堂印刷株式会社
口絵印刷　東京プロセス株式会社
本文用紙　三菱製紙株式会社
クロス　日本クロス工業株式会社
製函　加藤製函印刷株式会社
製本　小泉製本株式会社

発行所　中央公論社

東京都中央区京橋2丁目1番地
電話（561）5921（代）振替東京34

目次

赤と黒　3
解説　548
年譜　568

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

赤と黒

——一八三〇年代史——

出版者序

この作品がまさに刊行の運びにあった時、かの七月の大事件が勃発して、人々の心を、想像力の所産などにはいたって不利な方向に向けてしまった。[1] 以下の原稿は一八二七年に書かれたと信ずべき理由がある。

（1） 七月の大事件とは七月革命をさす。一八二七年云々は、もちろん作品の高度に政治的な内容をカムフラージュするためのもので、実際に『赤と黒』が書かれたのは一八二九～三〇年である。

第一部

真実。苛酷な真実。

ダントン

第一章　小さな町

少しはましな連中を
幾千集めてみたところで
籠は陽気になりはせぬ。

ホップス

ヴェリエールというその小さな町は、フランシュ＝コンテ（フランス東部、スイスとの国境地方）の中でも最も美しい町の一つに数えられよう。赤い瓦、尖った屋根の白い家々が丘の斜面にひろがり、点在する亭々たる栗の木立ちが、丘のわずかな起伏をも余さずくっきり描き出している。町の城壁は昔スペイン人の手で築かれたもので、今は廃墟になっているが、その下数百尺のあたりをドゥー河が流れている。

ヴェリエールは北側に高い山を背負っている。これはジュラ山系の支脈の一つだ。そのヴェラ山山頂の鋸歯は、十月、最初の寒気の訪れるころから早くも雪におおわれる。山から落ちてくる急流は、ヴェリエールの町をよぎってからドゥー河に注ぎ、これが多くの製材所に動力を提供している。いたって簡単な工業だが、町方というより百姓に近い住民の大部分は、このおかげで一応楽な生活をしているのである。しかし、この小さな町を豊かにしたのは製材工場ではない。町全体の暮らし向きが豊かなのは、俗にミュルーズものと言われる更紗製造工業のおかげであって、ナポレオン失脚以来、ヴェリエール中の家はほとんど軒並みに表構えが改築されたくらいだ。

この町へ一歩足をふみ入れるが早いか、誰しも、ある機械の轟音に驚いてしまう。騒々しくて、見たところ凄じい形の機械だ。幾十もの重い鉄槌が、急流の水で回る水車で持ち上げられては落ちてきて舗石を揺がせる。その鉄槌の一つ一つが、日に幾千とも知れぬ釘を作り出しているのだ。この巨大な鉄槌の打ちおろす下へ小さな鉄片を差し出すのは、うら若いきれいな小娘たちの役、と、たちまち鉄片は釘に変わる。この仕事は一見いかにも荒っぽく見え、フランスとスイスとを分かつこの山間地方にはじめて足をふみ入れる旅行者を最も驚かせるものの一つだ。ヴェリエールの町に入った旅行者が、大通りを上って行く者の耳を聾するばかりの、この大層な製釘工場は誰のものかと尋ねれば、相手は間延びのした田舎訛で答える——「ああ、ありゃあ、町長さんのもんでさあ」

このヴェリエールの大通りは、ドゥー河の岸辺から丘の頂まで上り坂になって続いているが、旅行者がほんのしばらくでもこの大通りで歩を休めるなら、きっと、い

かにも忙しげで、尊大な感じの大男の姿を見かけるに相違ない。

その男の姿を見ると、誰もが急いで帽子をとる。髪はすでに半白。服も灰色、勲章もいくつか持っている男だ。額はひろく、鼻は鷲鼻だが、全体としてはまず整った顔だちと言えよう。ちょっと見なら、その顔は、村長風の貫禄に加えて、五十近くの年輩者にもまだ残っていることのある一種の魅力まで持ち合わせているとさえ見えるかもしれない。が、パリから来た旅行者なら、その自己満足といい気な思い上がり、それと一緒になったなにか視野の狭い、知恵のなさそうな感じに、腹が立ってくるはずだ。結局のところ、この男の才能とは、せいぜい貸した金をきちんと取りたてること、自分が金を借りた時はできるだけ払いを延ばすこと、この二つに尽きるということがわかる。

ヴェリエールの町長レナール氏とはざっとこういう人物だ。重々しい足どりで通りを横切ると、彼は役場に入り、旅行者の視界から姿を消す。が、旅行者が足をのばしてもう百歩ほど上へ行くと、かなりりっぱな構えの邸宅が眼に入るはずだ。家の周囲の鉄柵越しには、みごとな庭園も見えよう。その向こうには、ブルゴーニュ地方の丘が作り出す地平線が現われる。それはまるで、眼を楽しませるために、誂えむきに出来ているといった感じだ。この眺めは、けちな金銭問題にからまる悪臭ふんぷんたる雰囲気に、そろそろやりきれなくなりだした旅行者に、そんなことをすっかり忘れさせてしまうに足りる。

旅行者は、この家がレナール氏のものと教えられる。ヴェリエール町長が、このりっぱな切石造りの家をついに最近新築したのは、例の大きな製釘工場からあげた収益のおかげである。なんでも、町長の家はスペイン系の古い家柄とかで、一説によるとルイ十四世の当地征服（一六七八年）よりもだいぶ以前から、この土地に住みついていたのだともいう。

一八一五年以来、彼は工業家たることを恥としている。その一八一五年（王政復古をさす）が、彼をヴェリエールの町長にしたからだ。例のみごとな庭園は、ドゥー河の岸辺までいくつもの段をなして下ってゆくが、そのあちこちを雛壇状に支えている多くの石垣にしても、やはりレナール氏の鉄取引きにおける才覚の賜物なのである。

が、このフランスでも、ライプツィッヒ、フランクフルト、ニュルンベルクなどドイツ工業都市の周囲に見られるあの絵のような庭園が見られると期待してはならない。フランシュ＝コンテでは、石垣を築けば築くほど、つまり自分の地所内に一列また一列と石を積みあげるほど、それだけ多くの尊敬を隣人から受ける資格が生ずるのである。レナール氏の庭は石垣だらけだが、これにし

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

ても、現在の地所は法外な金を出して小口に土地を買い集めた結果だというので、よけい世間の感嘆の的なのだ。たとえば例の製材小屋である。ドゥー河の岸の変な場所に建っているから、ヴェリエールの町へ入るとき必ず人の注意をひくし、その屋根いっぱいにのさばった看板に、おそろしく大きな字で書かれた「ソレル」という名も眼につくはずだ。この小屋も、六年前までは、現在レナール家の庭の四番目のテラスの石垣が築かれている場所にあったのである。

日ごろ人を人とも思わぬたちの町長も、強情頑固な百姓のソレル老人を向こうにまわしては、だいぶ手を焼かざるを得なかった。工場を移転させるために、大枚のルイ金貨をはずまねばならなかったのである。製材小屋の動力になる公用河川の方は、レナール氏がパリ官辺筋に顔がきくところから、これを迂回させるようにうまく事を運んだ。この恩典は一八二＊年の選挙後、彼が得たものである。

彼はソレルに、一アルパンに対して四アルパンの割で、もとの土地より五百歩ほど下方のドゥー河沿いの土地をやった。しかも、この場所の方が樅板の取引きにはずっと好都合であるにもかかわらず、ソレル爺さん（金持になってからは皆がそう呼んでいる）は、相手のあせりと矢も楯もたまらぬ土地所有欲につけ込んで、巧みに六千フランもの金をせしめてしまったのだ。

この取引きが土地の消息通の間でとかくの批判をうけたのは事実である。ある時――それは今から四年前のある日曜日のことだったが、レナール氏は、町長の正装に身をこらして教会から帰る途中、遠くからソレル老人の姿を見かけた。老人は三人の息子に取り囲まれ、町長を見つめながら薄ら笑いを浮かべていた。この薄ら笑いを見て、町長は、否応なくある一事を悟らされたのである。以来、彼は、例の交換をもっと有利に行なうこともできたはずだと、思い続けている。

ヴェリエールで世間の尊敬を得るためには、石垣をたくさん築くのも結構だが、その際なにより肝心なことは、例年春になるとジュラ山脈の谷あいを越えてパリへ出かけてゆく石工たちの、イタリア仕込みの設計など、決して採用しないことだ。そんな新しがりをしようものなら、軽率な建設主は生涯へそ曲りという評判をたてられ、フランシュ＝コンテで大方の尊敬を受けている賢明かつ穏健な人士から永久に見放されてしまう。

事実、これら賢明な人々は、全く我慢のならぬ専制をこの土地に布いている。パリというあの大共和国で暮らしたことのある者にとって、小都市の生活が耐えがたくなるのは、まさに、このけしからぬ一語のためによる。輿論の専横（しかもなんという輿論だ！）、それが愚劣

なのは、フランスの小都会でも、アメリカ合衆国でも変わりはない。

第二章　町　長

権勢！　はたして、それがとるに足らぬものでしょうか？　愚者の尊敬、小児の感嘆、富者の羨望、賢者の軽蔑を買うそれが。

バルナーヴ

レナール氏の為政者としての名声には幸運なことだったが、ドゥー河の流れから高さ百尺ばかりのところにある、丘に沿った公共散歩道に、大がかりな土留めの石垣が必要になったことがある。この散歩道からの眺めは、申し分ない地の利を得て、フランスでも有数のものだが、毎年春になると雨水が道に溝をつくり、穴をあけて、通行不能になってしまう。この不便さは誰しも痛感していたところだし、ここでレナール氏の出馬が必要になったのはむしろ幸運だったわけで、彼は高さ二十尺、長さ三、四十間に及ぶ石垣を作り、為政者としての名を不朽にしこの石垣の胸壁の件で、レナール氏は三度もパリへ出かけなければならなかった。二代前の内務大臣がヴェリエールの散歩道計画に絶対反対を表明したからだが、その胸壁も現在は地上四尺の高さに出来上がっている。しかも、このごろでは、まるで過去現在の大臣たちをすべて小馬鹿にするように、その上に切石を敷きつめている有様である。

前夜別れを告げてきたばかりのパリの舞踏会に思いをはせながら、青味がかった美しい灰色のこの大きな石材にもたれて、私の視線は幾度ドゥー河の谷底を眺めやったことだろう。かなた、河の左岸にはいくつかの河谷が屈曲し、その底には細い水流がはっきりと見分けられる。いくつもの滝を連ねて、それらはドゥー河へ落ちてゆく。この山間では、太陽は灼けつくようだ。陽が真上から照りつける時、この高台にあって旅行者の夢想をまもってくれるのは、みごとなプラタナスの木立ちである。これらの木々がすみやかに成長し、青味がかった美しい緑を見せているのも、もとはと言えば町長氏が土留めの石垣の向こうに作らせた埋立地のおかげである。つまり彼は、町会の反対をおしきって、散歩道の幅を六尺以上もひろげたのだ（彼は極右王党派であり、私は自由主義者だが、このことに関しては、私も彼に讃辞を送りたい）。町長

この高台(テラス)こそ、かのサン＝ジェルマン＝アン＝レ(パリ郊外の旧王宮の一)のそれに比肩し得るものだという意見を抱いているのは、こういう事情による。

私としては、この「忠誠散歩道(クール・ド・ラ・フィデリテ)」について非難すべき点は一つしか見あたらない。ちなみに、この公式の名称を彫りつけた大理石の板は二十ヵ所近くの場所に見られるが、これでレナールはまた一つ勲章をもらったわけである。「忠誠散歩道」に関して私が非難したいのは、あの勢いよく茂ったプラタナスを丸坊主に近くなるまで刈り込ませる当局の野蛮なやり方である。樹高を低くし、梢(こずえ)を丸くひしゃげた形に刈り込んで、つまらぬ野菜じみた格好(かっこう)にしてしまうかわりに、イギリスで見るような、みごとな形に仕上げてやるのが一番いいはずなのだが。しかし、町長さんの意向の前には是も非もない。年に二回、町有の樹木はすべて容赦なく枝を払われる。土地の自由主義者たちの主張するところによると、助任司祭のマスロン師が、落とした枝を着服する習慣になってから、お上(かみ)の植木屋の手の入れ方がよけい激しくなったというが、これは誇張というものだろう。

この若い助任司祭は、シェラン師および近在の司祭数人の目付役(めつけやく)として、数年前ブザンソンから派遣されて来た。ヴェリエールに引退していた元イタリア遠征軍の軍医正(いせい)で、町長の意見によれば、生前過激革命派(ジコバン)であると同時にナポレオン派(ボナパルティスト)でもあったという一老人が、ある時、このみごとな木々を定期的に刈り込むことについて町長に苦情を述べたことがあった。

「私は木蔭が好きです」町長の答え方にはいささか威厳がこもっていたが、それはレジョン・ドヌール勲章を受けている外科医に話しかけるにふさわしいものだった。「私は木蔭が好きです。木蔭を作るために私の木を刈り込ませるわけです。木というものにそれ以外の用途があるとは思えませんな。もっとも、あの実用的な胡桃(くるみ)の樹のように収入にならない場合のことですが」

収入になる——これこそヴェリエールですべてを決定する重大な言葉だ。この一語で、住民の大半の平生の考え方は言いつくされている。

収入になる——これが、この一見いかにも美しい小都市で、すべてを決定する理由なのである。この土地に来たばかりのよそ者は、町をとりまくすがすがしい深い谷谷の美観に魅せられて、住民たちは美に対する感受性に富んでいると思いこむかもしれない。事実、彼らは土地の風景のよさのことばかり口にするし、彼らがそれを重要視していることは否めない。が、それは、風景の美しさが客寄せになり、客の落とす金が旅館業者を豊かにし、またそれが入市税というからくりで町の収入になるからなのだ。

ある秋の晴れた日、レナール氏は妻に腕をかしながら「忠誠散歩道」を散歩していた。もったいぶった調子の夫の話に耳を傾けながらも、レナール夫人の眼は不安げに三人の男の子の挙動を追いつづけていた。一番上の子は年のころ十一くらいだろうか、その子があまり何度も胸壁に近寄りすぎる。それに、その上に登りそうな気配だ。優しい声がアドルフという名を呼ぶ。と、そのたびに子供は大それた計画を放棄するのだ。レナール夫人は三十ぐらいの年格好と見えるが、まだなかなかの美人である。

「今にきっと後悔するさ、あのパリの紳士も」レナール氏は腹立たしげな様子で言った。その頬はいつもより血の気が失せている。「俺だって宮中に知り合いがないわけじゃなし……」

ところで、これから二百ページにわたって私は田舎の話をしようと思っているのだが、かと言って、田舎者の会話の長たらしさや、その虚々実々の駆け引きを披露して読者を悩ませるような不作法はしないつもりである。

ヴェリエールの町長がそれほど毛嫌いするパリの紳士とは、かのアペール氏（当時実在の監獄対策専門家）にほかならない。二日前のこと、どういう手段を見つけたものか、彼はヴェリエールの監獄や貧民収容所のみならず、町長や土地のおもだった地主連が無報酬で経営を預かっている慈善病院の中にまで、うまく入り込んでしまったのである。

レナール夫人はおずおずとこう言った。「でも、あのパリの方がなにかなすったとしても、あなたにどんな迷惑がかかりますの。あなたはほんとに誠心誠意貧しい人たちのためを図ってやっていらっしゃるんですもの」

「奴が来たのは、単に悪い噂をばらまくためなんだ。いずれ、自由主義の新聞に記事を載せるんだろう」

「でも、あなたはそんな新聞なんぞお読みにならないじゃありませんの」

「だが、そんな過激革命派の新聞記事の噂はこっちにも伝わってくる。そういうことで気は散るし、いいことが出来なくなるんだ。（原註）俺としては、あの司祭のことは絶対に勘弁できないぞ」

（原註）実録である。

第三章　貧民の福祉

徳高く、しかも策を弄さない司祭は一村にとっての神である。

フルーリ

ヴェリエールの司祭は、八十歳という高齢にもかかわ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook